

## [010]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7347442>

---

出版情報：ポリモルフィア. 10, 2025-03-21. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



## 2023 年度ジェンダー研究に取り組む学生への研究助成プログラム 採択研究要旨

### Beyond Numbers: Demographic Influences and Institutional Gender Equality in Academia

Kotomi IDEISHI

School of Interdisciplinary Science and Innovation, B4

This investigation (N=1,168) delves into the pressing issue of sexism in higher education and examines whether gender equality within academic institutions serves to diminish its prevalence. Focusing on Kyushu University in Japan and Stockholm University in Sweden, the research explores the correlation between gender equality, demographic variables, and sexism within these distinct academic settings. Utilizing the Ambivalent Sexism Scale, Modern Sexism Scale, and Neosexism Scale, the study assesses sexism among diverse groups of students and staff, considering factors such as gender, age, educational background, and exposure to gender studies courses. The results reveal that at Stockholm University, where gender equality initiatives are more pronounced, there is a notable association with lower levels of hostile and neosexism, particularly among female participants. However, these efforts do not comprehensively address more implicit

forms of sexism, indicating the persistent nature of benevolent and modern sexism despite a climate of increased diversity. Moreover, the study finds that men consistently exhibit higher levels of sexism across all forms, aligning with broader societal patterns. Intriguingly, while exposure to feminist theory and gender studies shows a potential for reducing overtly hostile sexism, it appears less effective against benevolent and modern sexism. Additionally, the anticipated correlation between older age groups and increased sexism was not substantiated, suggesting that age alone is not a definitive factor in sexist attitudes within university contexts.

### 恋愛経験と自己成長の関連性及び 性差についての探索的研究

全 哲夜

大学院人間環境学府 修士課程1年

#### 1. 研究背景

「発達の危機」は急激な変化が生じ、個人の認識や感情の混乱をもたらす時期であり、心身の不健康な状態を招く一方で、個人の発達や成長を促

進する可能性もある (Erikson, 1959 ; Caplan, 1964)。日本の若者が発達危機に陥る原因には、対人関係のストレスが多く見られる。恋愛関係は重要な親密関係であり、若者の発達や成長に影響を与え、多くの方の関心を集めている。しかしながら、恋愛経験と自己成長との関連を系統的に考察する研究は限られており、近年の恋愛交際の諸現象について男女間の差異が大きいため、社会学だけでなく心理学の視点から捉える必要があると考えられる。本研究では、心理学的視点から恋愛経験と若者の自己成長との関連性を探究し、今後の研究の基盤となることを期する。

## 2. 研究方法

本研究では、内閣府や国立社会保障・人口問題研究所など公開資料やデータ、CiNiiで公開された研究論文、書籍などを研究資料として利用する。具体的には、恋愛状態、過去の恋愛経験、恋愛意欲の3つの側面において、収集された統計データを整理・分析し、発達の視点で若者の恋愛経験の動向や恋愛交際中に生じたリスク・課題への考察を中心に行った。また、恋愛のリスクや課題を乗り越え、自己成長の達成について、恋愛研究や心理学に関する論文や資料について文献レビュー・読解を行い、その内容について検討する。

## 3. 研究結果

現在日本の若者では、恋愛交際の経験がない、恋愛に関心がない、または恋愛していない若者の割合が増加している傾向が見られる。特に、この傾向は女性より男性の方が顕著である。それは、大学への進学、就職・結婚、結婚年齢や出産年齢の上昇などによって、心理的危機を乗り越え、ア

イデンティティを獲得する機会が先延ばしにされ、アイデンティティの確立の程度が低いことが推測される (大野, 1995)。また、女性は恋愛経験が豊富で、過去の恋愛から学んだことを新しい恋愛に生かす傾向があり、これがアイデンティティの確立に寄与していると示唆された (北原ら, 2008)。

恋愛交際を通じて、若者の自尊感情や精神的安定、対人関係の変容を促進し、ストレス反応を軽減し、自己の連続性・一致性を高め、アイデンティティの確立に役立つ自己成長をもたらすことが明らかになった。

## 主要参考文献

- Caplan (著), 新福尚武 (監訳). (1964). 予防精神医学. 朝倉書店.
- 内閣府. (2023). こども・若者の意識と生活に関する調査 (令和4年度)
- 日本性教育協会. (2019). 「若者の性」白書: 第8回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- 信野良太. (2008). 自己成長感尺度作成の試み. 北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集, (11), 125-136.
- 牛窪恵. (2015). 恋愛しない若者たち コンビニ化する性とコスパ化する結婚. ディスカヴァー・トゥエンティワン

# 中国映画における百年間の女性像の変遷から見る女性意識の変化

劉 威桐

大学院人間環境学府 修士課程1年

## 1. 研究背景

男女差別指数の結果から、中国の女性はあらゆる面で差別を受けているわけではないということも明らかになった。映画は文化製品として社会文化の変革や転換を反映することができる。特に中国はイデオロギー主導の社会主義国家として、この特徴がより顕著である。女性像の変遷を研究することにより、中国社会の歴史的な進化と価値観の変化を理解することができる。そして、映画は大衆メディアの一つとして教育的な要素を持っているが、映画での女性のイメージや役割は、観客の認識、価値観、行動パターンに直接影響を与える。女性形象の変化や表現方法を研究することにより、この影響が中国社会や個人に与える意義を理解し、反省することができる。現代社会では、女性は依然として職業の発展、家族の責任、性差別、平等な権利など、さまざまな課題に直面している。本研究を通じて、現代社会が女性に対して抱く期待やプレッシャーを理解し、女性が直面する問題を解決する方法を探求し、性別平等の推進、性別ステレオタイプの廃止、社会多様性の促進において重要な参考になることが期待される。

## 2. 研究方法

本研究ではまず時代別に作品を紹介し、女性主人公の生き方などをストーリーに沿いながら見ていく。次は中国女性史に関わる文献をもとに、中国女性の意識の変化を分析したいと思う。

## 3. 分析結果

中国映画における百年間の女性像を見ると、女性の意識と地位の絶え間ない起伏の変化を感知することができる。現代社会では女性に対してますます寛容で理性的に対応している一方で、現代文明も女性を困惑させ個人の存在価値、自己生命意識に迷い、女性主体を強大な主流イデオロギーの中に埋没させる傾向がある。

### 主要参考文献

- 映像の性別と革命的イデオロギー 徐大慰  
張芸謀封建家庭を題材にした映画における女性像の視覚的形成について 張舒淇  
性別の視点と見られる風景— 1915-1949年中国映画における女性像解析 何静  
新時期以来の中国の主旋律映画の女性像研究 陳丹  
新時期の中国映画における女性像の転換 王郁松  
映画の性別暴力 方剛  
言語と性別 商務印書館  
時代の鏡の中の性別の考え 馬姝著  
性別とメディア Rosalind Gill  
性別の目の下の映像表現 中国社会科学出版社  
欲望と尊厳（転換期の中国の階層的性別と親密な関係） 肖索未

## 戦後日本における、家族規範の模索

千々松皇陽

大学院人間環境学府 修士課程1年

### 1. 研究背景

日本国憲法の制定によって、個人の尊厳と男女の本質的平等が保障されるようになった。それに伴い、「家」制度は前時代の遺物だとして民主化論者達の批判対象となり、それと対比させる様にして「家族の民主化」の必要性が主張された（本田 2018）訳であるが、そのような時代において家族と隣り合わせの環境にあり、法における家族規範を基に家族へ介入する立場にあったのが家庭裁判所である。先行研究では、家庭裁判所の家族問題への向き合い方、解決方法の解明が残された課題だとされている。本発表では、家庭裁判所による、新民法の理念を基にした家事事件の解決方法の普及、その具体を先行研究へ付け加えることを目的とする。

### 2. 研究方法（史料）

本稿では、家庭事件研究会が発刊している『ケース研究』を扱う。昭和24年創刊の季刊誌である『ケース研究』は、実際の少年事件または家庭に関する調停事件を各号のテーマに設定し、事件に関わった調停委員をはじめ、他地域の家庭裁判所裁判官や最高裁判所事務官などの出席者によって開かれた研究会を議事録として掲載している雑誌である。

### 3. 分析結果

民法改正後に「家」が根付いているそのような現状において、家庭裁判所は、調停制度を通じて

“民主的な精神”を浸透させようと働きかけていた。新民法の精神を一貫して貫き、「家」制度の考え方とは妥協しないことが家庭裁判所における共通の理念として存在しており、同時に、その必要性が『ケース研究』によって全国の家庭裁判所へ示されていたのである。

### 主要参考文献

- 利谷信義「法社会学における家族研究の立場から」『家族社会学研究』第4巻4号、1992年
- 小山隆編『現代家族の研究』、弘文堂、1970年
- 長沼秀明「家事審判所の組織と権能：日本国憲法施期の役割」『川口短期大学紀要』第35集、2021年
- 本田真隆『家族情緒の歴史社会学：「家」と「近代家族」のはざまを読む』晃洋書房、2018年
- 川島武宜『イデオロギーとしての家族制度』岩波書店、1957年
- 家庭事件研究会『ケース研究』家庭事件研究会出版部、1949年-現在、国立国会図書館デジタルアーカイブ <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2895028>（閲覧2024/2/16）

## 韓国映画・テレビドラマに見るジェンダー観

西谷 萌

大学院芸術工学府 修士課程1年

### 1. 研究背景

東アジアは世界的に見て男女平等に遅れをとっ

ている国が多い。そういった状況の中で、世界経済フォーラムによるレポートである「ジェンダーギャップ指数」を指標としてみたとき、韓国をジェンダー平等が進んできている国としてあげることができる。また、メディアの中に描かれるジェンダー観が視聴者のジェンダー意識の形成に影響を及ぼすことについての研究が多くされてきている。そういった現状を踏まえ、この20年間で韓国のジェンダー観が韓国においてどのように変化してきたのかを、韓国の映像作品をもとに分析したい。

## 2. 方法

『バラ色の人生』(2005年・テレビドラマ)、『ダンシング・クイーン』(2012年・映画)、『82年生まれ、キム・ジヨン』(2019年・映画)、『医師チャ・ジョンスク』(2023年・テレビドラマ)の計4作品を対象とした。分析は主にキャラクターの言動や社会的地位に注目して行った。また、ヒロインとヒーローの登場シーンの場所別割合、家でのケア労働と仕事(有償労働)の割合、職場でのケア労働と仕事の割合について調べた。なお、テレビドラマについては初回、中盤の1話、そして最終回の計3話について計測し、その平均をとったものとしている。

## 3. 分析結果

ヒロインとヒーローの人物像を見てみると、男性優位的な職業設定やステレオタイプに当てはまったキャラクターが多かった。また、行動やセリフに注目してみると、儒教社会に基づく家父長制的な価値観は、高年齢層の人物には根強く残っているものの、若い世代を中心になくなりつつあ

ることが明らかになった。統計分析からは、男性によるケア労働が女性と比較してかなり少ないか全く登場しない作品ばかりで、性別役割分業の意識は根強く残っていることなどがわかった。分析全体を通して、女性の職業の専門性が高まっているなど、女性の社会進出と地位向上が現れていた。

## 参考文献

伊藤 公雄, 樹村 みのり, 國信 潤子 (2019). 『女性学・男性学—ジェンダー論入門 第3版』. 有斐閣アルマ.

金 早雪 (2023). 『現代韓国ジェンダー事情—見果てぬ「両性平等」への途—』. 大阪市立大学経済学会, 経済学雑誌 123 (2), pp35-53.

荒川 生 (2019). 『フェミニズムの新しい潮流—「第4波フェミニズム」』. 成城大学常民文化研究会, 常民文化 (42), 43-55.

## LGBTQ プレイヤーをエンパワーする ゲームを作るために 必要な要素を明らかにする研究

ZHU Yiwen

大学院芸術工学府 修士課程1年

### 1. 研究背景

LGBTQ要素が組み込まれたメディアコンテンツはLGBTQの人々をエンパワーする可能性があるとの指摘がなされている。しかしながら、主流なメディアでは、LGBTQキャラクターの多様性が十分に表現されておらず、特に異性愛規範に従ったゲームにおいては、ジェンダー差別が依然

として課題となっている。この状況が引き起こす課題の一つとして、LGBTQプレイヤーがゲーム関連の空間で不適切な体験をすることが報告されている (Ruberg, 2015)。本研究の主な目的は、LGBTQプレイヤーをエンパワーするために、ゲームに必要な要素を明らかにし、それに基づいてデザイン提案を行うことである。この研究を通じて、ゲーム開発者がLGBTQプレイヤーのニーズを理解し、より包括的で快適なゲーム体験を提供するための手法と指針を開発することを期待する。

## 2. 研究方法

本調査では2023年9月から10月にかけて、ゲーム経験が豊富な20～30代の調査協力者10名に対して、半構造化インタビューを実施した。調査協力者の10名には、調査の趣旨と内容、プライバシーの確保、研究への参加は自由意志であることなどについて口頭で説明し、同意を得た。調査協力者10人中7人は筆者の知り合いのクリエイターであり、1人は協力者の友人で、2人はSNS (Weibo) を通じて募集した。調査協力者は、(1) ゲームが好き、(2) 自分が性的マイノリティであると認識しているという条件をつけて募集した。主な質問項目は以下の通りである。(1) 「性的マイノリティとしての経歴」(2) 「ゲーム体験の経歴」(3) 「好きなゲームとその理由」(4) 「嫌いなゲームとその理由」(5) 「LGBTQプレイヤーとしてゲームを遊ぶ際に一番大事な所」などでそれについて調査協力者に自由に話してもらい、その流れの中で筆者が質問をし、詳しく語ってもらった。

## 3. 分析結果

本研究ではインタビューにおける共通したキーワードを抽出し、以下のようにカテゴリー化し、関連するカテゴリーを4つのグループに分類した。①「キャラクターデザイン」、②「キャラクターのセクシュアリティ」、③「開発者の意図」④「包摂的な雰囲気」

今回の調査から、LGBTQプレイヤーはゲーム内の表象にジェンダー規範から逸脱しているものを求めていることが分かった。キャラクターデザインについて、1) 女性キャラクターはなるべく女性性(性的魅力/ジェンダー規範に従う性役割)の表現を避ける 2) 男性キャラクターは男性性(支配的/攻撃的)の表現をするよりも、「やさしい、感受性が強い、弱音を吐く、感情的になる」などの表現のあるデザインを求めていること。キャラクターのセクシュアリティについて、1) 自由に主人公のセクシュアリティを選択できる、2) 多様なセクシュアリティを持つキャラクター表象を増やすこと。開発者について、1) LGBTQの関係者を増やすこと、2) 開発者がLGBTQのプレイヤーのための、新しい試みをしていること。最後に、「包摂的な雰囲気」について、協力者たちは1) 排除されてると感じない、2) アイデンティティを特別視しない表象を求めていることが分かった。

## 主要参考文献

Green, Melanie C., Timothy C. Brock, and Geoff F. Kaufman. "Understanding media enjoyment: The role of transportation into narrative worlds." *Communication theory* 14.4 (2004) : 311-327.

Ruberg, Bonnie. "No fun: The queer potential of video games that annoy, anger, disappoint, sadden, and hurt." QED: A journal in GLBTQ worldmaking 2.2 (2015) : 108-124.

巴山玉蓮, 星旦二. エンパワーメントに関する理論と論点 [J]. 総合都市研究, 2003, 81: 5-18.

## 衣服に対する印象判断の性差 —シルエットを中心に—

依田拓海

大学院芸術工学府 修士課程 1年

### 研究背景

ジェンダーレスファッションとは一般的に「性差が存在せず、誰もが自由にデザインを分かち合うことが出来る装い」とされている。しかし新實(2019)はこれまでのジェンダーレスファッションはステレオタイプ化されたイメージを融合させるパターンを指す場合が多いと指摘している。以上を踏まえ、本研究では衣服に対する印象判断にどのような性差が存在しているか追及し、ジェンダーレスファッションの可能性を更に探っていく。

### 研究方法

衣服選択に関してアンケート、及び文献調査を行う。衣服のシルエットが性差に影響するという予備実験を経て、フォルムに着目したモデルケースとなる衣服を数点制作する。制作したモデルが男性服と女性服のどちらに近しいと感じたかアンケート調査、SD法による検証を行い、衣服の印

象判断に関わる要素を考察する。

### 結果、考察

アンケート結果より、一般的に見られないような特徴的なシルエットは男女どちらとも取れない中性的な衣服の印象を与えた。またそのような構造は記憶内の衣服の構造に結び付き、その衣服の印象に認識が強く影響されると考察した。

### 参加文献

- ・新實五穂「「ジェンダーレス」な服飾における性差-全国紙三紙の掲載記事を対象として-」お茶の水大学人文科学研究No.15,2019, pp.41 - 51
- ・藤田結子、成実弘至、辻泉[編集]『ファッションで社会学する』有斐閣、2017
- ・キャリー・ブラックマン[著]、桜井真砂美[翻訳]『ウィメンズウェア100年史』トゥーヴァージンズ、2020
- ・キャリー・ブラックマン[著]、桜井真砂美[翻訳]『メンズウェア100年史』トゥーヴァージンズ、2020
- ・山口みどり[編集]、弓削尚子[編集]、後藤絵美[編集]、長志珠絵[編集]、石川照子[編集]『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房、2023
- ・一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同[著]、佐藤文香[監修]『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた—あなたがあなたらしくいられるための29問』明石書店、2019
- ・尾崎 幸謙[著]、荘島 宏二郎[著]『パーソナリティ心理学のための統計学』誠信書房、2014
- ・深井晃子[監修]『FASHION世界服飾大図鑑(コンパクト版)』DK社、2020

・能澤慧子[監修]『史上最強カラー図解世界服飾史のすべてがわかる本』ナツメ社、2012

## 結婚・出産が女性の貯蓄行動に与える影響のパネルデータ分析

柴田 昌

大学院経済学府 修士課程2年

### 1. 研究背景

近年結婚や出産に対する考え方が変化しているなかで、結婚・出産が女性の貯蓄行動にどのような影響を与えるのか明らかにする。女性の個人資産に着目して結婚や出産が貯蓄にどのような影響を与えるのかに加えて、世代ごとにどのように違いがあるのかみていく。本研究の特色は、観察期間の長いパネルデータを用いるため、女性の個人資産について世代間の比較を行えることにある。これまでの研究では、公開されているパネルデータが少ないことから短い期間、少ないサンプルの分析が多かった。また、特定の世代の分析に焦点をあてているため、結果はばらつきがあった。共働き世帯の増加や核家族化の進行など女性を取り巻く環境は大きく変わっているなかで、世代ごとの結果を比較することで、結婚や出産が貯蓄に与える影響の変化をみていく。

### 2. 研究方法

「消費生活に関するパネル調査 (JPSC)」を使用する。この調査は1993年から、24歳から34歳の女性1,500人を対象にほぼ5年おきに若い対象者を追加しながら続けられている。時代によ

て変化した取り巻く環境による違いを見るため1969-1973年生まれの「中高年層」、1984-1989年生まれの「若年層」を使って分析を行う。固定効果モデルを使用して、被説明変数には「女性個人の貯蓄」を用いる。ただし女性個人の貯蓄の捉え方は人によって異なる。人によっては家計の貯蓄としてひとまとめにしているところや、妻と夫で別々に個人貯蓄を持っているところがあるため複数の変数を作成する。主な説明変数では結婚・出産に関する変数を用いた。

### 3. 分析結果

本研究の分析の結果、結婚ダミーはいくつかのモデルで中高年層・若年層ともにマイナスに有意になっており、結婚することで個人貯蓄を減らすという影響がみられた。中高年層より若年層の方が結婚が個人貯蓄に与える影響は大きい結果になった。子どもの数については結果にばらつきがあったが、全体的に子どもは貯蓄を減らす傾向があった。また、子どもの数の個人貯蓄に対する影響は世代を経て弱くなっていた。

### 主要参考文献

Jay L. Zagorsky View, Marriage and divorce's impact on wealth, Journal of Sociology Volume 41, Issue 4 Pages: 406 - 424.

Yoko Niimi; Are Married Women Really Wealthier Than Unmarried Women? Evidence From Japan. Demography 1 April 2022; 59 (2) : 461-483.

Kureishi, Wataru; Wakabayashi, Midori. Review of Economics of the Household; Dordrecht 11-4, (Dec 2013) : 681-704.

永瀬伸子, 子どもコストの推計: 家計および資産  
面からの分析, 人口学研究/28 巻, 2001 年

## ジェンダー規範出現の哲学的分析 ——進化ゲーム理論的観点から——

宮内孝啓

大学院人文科学府 博士課程 2年

### 1. 研究背景

ジェンダー役割の分析では、合理的選択理論を用いたBecker (1985) の研究が有名である。しかし、近年ではBeckerの枠組みだけでは捉えられない事象が実証経済学の分野で報告されている。牧野 (2023) は実証経済学の立場から、ジェンダー格差の解消には、ジェンダー規範の変革が必要であると主張する。本稿では、ジェンダー規範がいかに生じてくるのかを進化ゲーム理論を用いて記述し、ジェンダー規範を変革していくための哲学的検討を行いたい。

### 2. 方法

ジェンダー役割 (性別役割分業)・ジェンダー規範という問題に対して、O'Connor (2019) による進化ゲーム理論的アプローチを適用する。本研究は理論的分析であるため、主に文献読解を中心とする調査を行う。そのために、社会科学の哲学や社会存在論、ゲーム理論やジェンダー論に関する文献を参照した。

### 3. 分析結果

文化進化の観点から、ジェンダー役割を分析す

ることで、ジェンダー規範が発達しやすいということがわかる。なぜならジェンダーによる役割分担が、人々が協調することの効率性を向上させるため、そうしたジェンダー規範が生じやすいからである。このことから、ジェンダー規範によって生じる格差に関心を持つ人々は、不公平を推し進める動的な力に対してつねに警戒し続けなければならない。また、そうしたジェンダー規範による不公平の是正には、人々の信念をよりよいものへと変えていく必要があることが明らかになった。

### 主要参考文献

- Åsta. (2018) . *Categories We Live By: The construction of sex, gender, race, & other social categories*. Oxford University Press.
- Becker, G. S. (1985) . "Human Capital, Effort, and Sexual Division of Labor." *Journal of Labor Economics*, 3 (1) :S33-S58.
- Bicchieri, C. (2005) . *The Grammar of Society: The nature and dynamics of social norms*. Cambridge University Press.
- 川口章 (2008) 『ジェンダー経済格差』、勁草書房
- 牧野百恵 (2023) 『ジェンダー格差: 実証経済学は何を語るか』、中公新書
- O'Connor, C. (2019) . *The Origins of unfairness : Social Categories and Cultural Evolution*. Oxford, Oxford University Press. (ケイリン・オコナー 『不平等の進化的起源: 性差と差別の進化ゲーム』、中西大輔監訳、大月書店、2021年)
- 大浦宏邦 (2008) 『社会科学者のための進化ゲーム理論: 基礎から応用まで』、勁草書房

## Negotiation of masculinities among gay migrants in the urban China

LI Huifeng

Graduate School of Integrated Science for Global Society, DC3

### 1. Background

The intranational migration has been a significant phenomenon in China. There is increasing study of migrant masculinity in China discussing the challenges male migrants face (Tsang, 2021; Kong, 2020; Rofel, 1999) . However, the voice of migrant sexual minorities is scant. This study explored how gay migrants navigate the masculinities of their migration process.

### 2. Research Method

This study adopted qualitative methods, including fieldwork, interviews, and participant observation. Interviews were conducted with 11 participants, and thematic analysis was used to analyze their experiences in migration.

### 3. Result

Gay individuals have historically been associated with femininity (Nardi, 2000) . However, this study found various and dynamic expressions of gay masculinities. Two themes emerged in their migration from hometowns to urban areas: some gay migrants embrace liberal masculinity to express their gay identity and embrace femininity, while others join competitive urban masculinity by working out and building a

masculine image.

### References

- Connell, R.W., 2005. *Masculinities*. Polity.
- Kong, T.S., 2020. The pursuit of masculinity by young gay men in neoliberal Hong Kong and Shanghai. *Journal of Youth Studies*, 23 (8) , pp.1004-1021.
- Nardi, P.M. ed., 2000. Gay masculinities (Vol. 12) . Sage.
- Rofel, L., 1999. 'Qualities of desire: Imagining gay identities in China', *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, vol. 5, no. 4, pp. 451-74.
- Tsang, E.Y., 2021. Transformative emotional labour, cosmetic surgery, and masculinity: Rural/urban migration in China's gay commercial sex industry. *Singapore Journal of Tropical Geography*, 42 (3) , pp.469-483.

## Restorying through translanguaging arts-based inquiry in English language education

YAO Claire Ji Shing

Graduate School of Design, DC2

### 1. Background

English language education in Japan is rooted in dynamics of cultural imperialism and native speakerism (Holliday, 2006) , or linguistic injustice. This harms learners' perceptions of

their abilities and potential, not to mention their sense of language ownership. These dynamics must be challenged through critical pedagogical approaches that center learner funds of knowledge (Moll et al., 1992). Arts-based inquiry in English language education is a powerful way to shift the master narrative informed by native speakerism. It facilitates learner restorying of their language practices and developmental trajectories, reauthoring their experiences in a way that acknowledges and celebrates their assets as emerging bilinguals and multilinguals (García, 2009).

## 2. Method

This ongoing qualitative study involved three case studies exploring the possibilities of arts-based inquiry processes at three educational institutions in Japan: 1) a national university self-access language learning center, 2) a public girls high school, and 3) a coeducational public high school.

## 3. Results

Preliminary findings point to the ways in which arts-based inquiry can foster subtle yet fundamental shifts around language practices and experiences as related to themes of social location, gender and sexuality, sensitive and traumatic experiences, and autonomy. Findings will be of interest to educators and educational leaders who aim to foster linguistic justice and global citizenship through innovative pedagogical

approaches.

## References

- García, O. (2009). *Bilingual Education in the 21st Century: A Global Perspective*. Wiley/Blackwell.
- Holliday, A. (2006). Native-speakerism. *ELT Journal*, 60 (4), 385–387.  
<https://academic.oup.com/eltj/article/60/4/385/499514>
- Moll, L., Amanti, C., Neff, D. & Gonzalez, N. (1992). Funds of knowledge for teaching: Using a qualitative approach to connect homes and classrooms. *Theory Into Practice*, 31 (2), 132–141.  
<https://doi.org/10.1080/00405849209543534>

## Elucidating the role of microglia in molecular basis of sex differences in Alzheimer's disease

Haiyan DU

Graduate School of Dental Science, DC3

### 1. Background

Studies have shown that Alzheimer's disease (AD) is less prevalent in men than in women; however, the mechanisms remain unclear (1). Microglia, play a crucial role in AD by releasing inflammatory cytokines and degrading aggregated amyloid  $\beta$  ( $A\beta$ ) via autophagy.

Microglial characteristics depend on sex, suggesting relating to AD (2, 3). Given that, we focused on testosterone, male sex hormone. Low testosterone has been reported to be associated with a higher risk of AD in men. In this study, we investigated whether testosterone in microglia regulates autophagy.

## 2. Methods

Mouse microglial cell line MG6 and AD mouse model were used. Autophagic flux was assessed by LC3 or p62, as autophagic indicators. Signaling pathway related molecules detected protein expression.

## 3. Results

We found that testosterone suppressed the phosphorylation of ERK in MG6 cells, suppressing mTOR, and promoting autophagy. A $\beta$  colocalized with LC3, indicating the uptake and degradation of A $\beta$ . Autophagy increased upon co-stimulation with A $\beta$  and testosterone. Male AD mouse model showed more autophagy. These results indicate that testosterone enhances autophagy in microglia, and thus may play a crucial role in the low susceptibility to AD in men.

## Main References

- (1) Hansen DV et al. 2018, The Journal of Cell Biology, 217 (2) :459-472;
- (2) Villa et al. 2018, Cell Rep.23:3501-3511;
- (3) Kodama et al. 2020, Nat Neurosci. 23:167-171

## 日本の大学における外国人女性研究者の現状と課題—九州大学を事例に

彭 子濃

大学院芸術工学府 博士後期課程4年

### 1. 研究背景

近年、日本では女性研究者の実態や課題を把握するための調査研究が盛んに行われ、その成果は研究環境や支援政策の改善等に役立てられている。しかし、日本で活躍する「外国人女性研究者」の実態把握や課題解決に焦点を当てた調査や研究は十分に行われていない。調査対象を日本の大学に在籍する外国人女性研究者に限定すると、その実態や問題の把握はさらに困難となる。そこで本研究では、まずは九州大学を事例として、同学に在籍する外国人女性研究者の研究遂行上の現状、課題およびニーズを把握し、彼女らの研究環境やキャリア発展を支援するための方策を提案することを目的とした。

### 2. 研究方法

九州大学に在籍する外国人女性研究者（学術研究に取り組む教授・准教授・講師・助教等を含む外国籍の女性教員・研究員）を調査対象として、Googleフォームを用いたWebアンケート調査を実施した。調査内容は基本属性と基本属性以外の項目に分け、全部で47の設問を設定した。アンケートの説明および調査票は日本語版と英語版を作成し、英語の自由回答は日本語に翻訳した。

調査対象の選定に当たっては、まず、九州大学の研究者情報サイトに登録されている研究者の一覧から、外国人名の研究者323名を抽出した。次に、女性であることが確認できた56名の

中から、メールアドレスを公開している25名と、J-GLOBALから連絡可能な9名の計34名に、アンケート調査への協力依頼メールを日英併記で送付した。

### 3. 研究結果

調査協力を依頼した34名中8名（准教授4名、助教3名、研究員1名）から貴重な回答を得た。基本属性の調査では、年代、国籍・出身国、職位、所属学部・研究科、専門分野、学歴、日本の滞在期間、言語能力等を把握した。基本属性以外の調査では、現在の研究環境や課題、要望などを把握した。その結果、回答者のほぼ全員が、外国籍であることは研究環境に一定の影響を与えていると感じていることがわかった。その理由の一つとして、「言葉の問題」が挙げられた。一部の研究者にとって、日本語能力が、昇進の機会、助成金の申請や報告書の作成、情報収集等に影響を及ぼしていることがわかった。また、外国籍であることを肯定的に捉え、母国の研究ネットワークや文化を活かすことができると答えた回答者もいた。性別に関する差別や課題の有無については、それらが存在することを示唆する回答があった一方で、半数が「ない」と感じていることがわかった。労働環境の改善や支援政策の充実に必要な措置に関しては、「研究支援者の配置拡充」を求める声が多かった。これらの回答や他の回答を基に、研究支援体制の強化、公正な評価システムの確立、メンタリングと指導体制の充実に関する支援策を提案した。

### 主要参考文献

河野銀子 [ほか] (編) (2021) 『女性研究者支援

政策の国際比較：日本の現状と課題』明石書店。

- 二神枝保 (2021) 「女性研究者の活躍を推進するための課題と展望：多様性と包摂の視点からの分析」『学術の動向』26 (2)、pp. 78-81。
- 二神枝保 (2020) 「女性研究者比率および指導的地位の女性研究者比率が低い理由と改善策」『人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査 (第1回) 報告書』、pp. 135-150。

